

第40回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校3年生の部 最優秀賞

私にとって母とは

弟子屈中学校 大井 美侑さん



「あなたの大切な存在は？」ときかれると、私は真つ先に家族のことが思い浮かびます。今回この「かあちゃん」という本を読み、大切な家族の一員である母のことについてよく考えさせられました。

私にとって母とは、いなくてはならない存在です。私を産み、育ててくれたことへの感謝はもちろん、部活のことで私が悩んだり甘えたりした時に励ましてくれたり、喝を入れてくれたことなどへの感謝もたくさんあります。

私の母は、毎日50分の道を運転し、職場へと向かっています。夜、遅くなってしまう時には帰ってくるのが10時を過ぎるときもあります。仕事から帰ってきてすぐに私たちのために母はご飯を作ってくれます。その他にも食器を洗ったり掃除をしたり、洗濯をしたりしてくれています。私も手伝ったりはしますが、やはり母への負担は一番大きいです。どんなに夜に疲れた顔をしていても、次の日の朝には笑顔で私たちの朝食を作ってくれています。毎日大変そうだなあと思っても、心のどこかでは、母親とはそんな大変な思いをするもので、戦争についてどう思うのかを聞いてみた。祖母は終戦の日の夜、電球の防空用カバーを取ったとき、その明るさに感動したそうだった。また祖母は、「今の平和がありがたい」と言っていた。平和は誰もが望んでいるのだと思う。だからこそ私は戦争を絶対にしてはいけないと感じた。戦争によって悲しむ人を増やしてはいけない、同じことを繰り返してはならない。この本を読み、祖母の話や聞く中で、強く思うようになった。

なんだろう、と決めつけてしまっている。しかし、この本を読んでからはそんな自分が恥ずかしくなりました。母親だけが無理をして、母親だから大変な思いをするというところは間違っていると思うようになりまし。母に怒られるとどうしてもムカついてしまい、反抗してしまう自分は、どれだけ母を困らせているんだらうとも考ええるようにもなりました。

「あなたの子どもも、ひとりこの世に生まれてくることはできません。生まれてきた瞬間一番そばにいてくれるのは母親です。それを考えると、母との繋がりがよりいっそう強く感じられます。この先、何が起ころい何度母を困らせるかはわかりません。何度母に反抗するかもわかりません。それでも、やはり、私の尊敬している、偉大な母とは、ただ一人しかいません。私も大きくなったとき、母親になるかもしれません。その時は私も、自分の母親のように強く、明るく、子どもから尊敬されるような母親になりたいと思います。

本の中には、子どもを守るために自分の人生を捨てた母親や、教育に厳しい母親や、優すぎる母親など、様々な母親がいました。そしてその子どもたちはそれぞれがそれぞれの方法で母親から自立をしました。

「寸評」 母親への感謝の気持ちをこつこつとすてきな感想文ですね。母親が子どもを世話をする。それが当たり前と考えるのが一般的ですが、それは美に大変なこと。そのことに気づけた大井さんはとても素晴らしいです。ぜひ、誰からも尊敬されるような自立した大人を目指してほしいですね。これからもいろいろな文章に触れて、自分の周りに対する感謝の気持ちをこつこつと広げてほしいと思います。



■高校生の部 最優秀賞

澄み切ったこの空に願う

弟子屈高校2年 藤江 弥生さん



八月十五日。それは第二次世界大戦が終わった日。今年で六十九回目となる終戦記念日、戦争体験者も含め人々は何を思っただろう。

八月十五日。それは第二次世界大戦が終わった日。今年で六十九回目となる終戦記念日、戦争体験者も含め人々は何を思っただろう。

許さない飛行機があることを知ったときは怒りを覚えた。このようなものを作った人は本当に人間なのか。

しか学びたいことのないことだが、この本をきっかけに私も祖母の話や聞くことが出来た。教科書には載っていない事を聞いた。祖母はまるで社会の先生だった。今までこれほど戦争について考えたことはなかった。自分の明確な意見を持つこともなかった。今回は戦争で戦った人たちに重点を置き述べたが、これが全てではない。広島・長崎には原子爆弾が投下され、多くの方が亡くなった。戦争をテーマとして考え、調べていくと、私自身辛い時もあった。しかし、目を背けてはいけない、知らなくてはならない、そう思わせたのがこの本だった。この本のおかげで自分なりの意見が持てた。自分なりの答えを導き出すことはとても大切だと思ふ。戦争体験者が年々減ってきている中、若い世代の人が戦争についてもっと知るべきだと思ふ。最後に、私は戦争に絶対反対だ。二度と同じことを繰り返してはならない。そう強く思ふ。

この話は「娘に会うまでは死ねない、妻との約束を守るために」。そう言い続けた男、宮部久蔵が、なぜ自ら零戦に乗り命を落としたのか。現在を生きる孫の健太郎とその姉の慶子が祖父の生涯を調べていく中で、真実が明らかになるというものだ。私は話を読み終えたとき、目頭が熱くなるのを感じた。なぜだろう。それは単に、「可哀想」などの言葉では表せないものがあつたからだと思う。戦争とはその人の心までも変えてしまう。平和な今を生きる私たちには決して分かって事のない過酷な状況があつたのだと思ふ。しかし、戦争を知らない私たちでも戦争について考えることで、戦争の痛みや悲しみ、苦しさを感ずることが出来るのではないか。

私は宮部の言葉に心を打たれた。特に印象に残っている言葉がある。「それなら死ぬな。どんなに苦しくても生き延びる努力をしなさい」。この言葉には強いメッセージが込められているように思ふ。戦争では多くの命が奪われた。その犠牲者一人ひとりにかけがえのない人、愛する人がいたはずだ。しかも犠牲者の中には若者が何人もいた。私は亡くなった人の皆が皆、「喜んで国のために死にます」と心から言っていたとは思えなかった。口先では言っていたかもしれないが、心の奥底では恐怖と懸命に戦っていたのだと思ふ。だから人間ロケットと呼ばれた桜花や特攻機という恐ろしいものを造り、それを使うことを決めた人を私は許すことが出来ない。確かに、物語を読み進めていく中で、日本の技術の素晴らしさを感じた。例を挙げるなら、零戦だ。相手国から見ればまさに脅威であり、その零戦を乗りこなすパイロットもまた素晴らしい人ばかりであった。しかし、桜花や特攻機のように生きて帰ることを

私はこの物語を読む度色々な感情が溢れてくる。それは過去と現在を行き来する文構成で、臨場感あるものになっていくからだと思う。また、戦友たちが様々な角度から一人の人物について語ることで、人物像が立体的なものになる感じがした。そして現代を生きる健太郎とその姉慶子は、祖父の世代が戦争体験者という私と同じ境遇であった。私たちが孫の世代は戦争を知らない。教科書で

「寸評」 高校生の部は、どの作品も甲乙つけがたい素晴らしい感想文でした。その中でも藤江さんの作品は、視点の変化に富んだ文章の構成が光っていました。大きく「人」という視点から「私」という視点に絞っていく展開はさすが高校生の文章です。内容も、難民の実態を知ることによって、自分たちが個人で知っていた環境に置かれていたのかを個人で知らせて終わらず、再び視点を人々に広げて終わらせるという構成も素晴らしいです。

書名『永遠の0』 百田 尚樹 著

「祖父は昔、飛行機乗りの訓練生だった」と祖母が教えてくれた。私はこの本を読み、戦争のことについてもっと知らなくにはいけないと思ひ私の祖母に話を聞きに行った。そこでは終戦の日について

「祖父は昔、飛行機乗りの訓練生だった」と祖母が教えてくれた。私はこの本を読み、戦争のことについてもっと知らなくにはいけないと思ひ私の祖母に話を聞きに行った。そこでは終戦の日について

「祖父は昔、飛行機乗りの訓練生だった」と祖母が教えてくれた。私はこの本を読み、戦争のことについてもっと知らなくにはいけないと思ひ私の祖母に話を聞きに行った。そこでは終戦の日について

「祖父は昔、飛行機乗りの訓練生だった」と祖母が教えてくれた。私はこの本を読み、戦争のことについてもっと知らなくにはいけないと思ひ私の祖母に話を聞きに行った。そこでは終戦の日について